



各調査地に赴き、調査を行い、それにより基本的な知識を身に付けることができた。今回の訪問により、日本の民俗学研究では、新しくできたものを速やかに把握して

いることに感心し、これからの研究生活に活用しようと思う。

## 日本滞在記

梶 曉 藝

(ブリティッシュコロンビア大学)



ブリティッシュコロンビア大学の大学院で、アジア研究をしている梶曉藝と申します。2014年12月1日から18日まで、交換研究員として神奈川大学非文字資料研究センターに滞在しました。

私は現在、19世紀韓国における国際法の発達に焦点を当てて研究をしています。韓国は、日本が国際法を受容・採用したことに非常に大きな影響を受けたため、日本での国際法の発達を研究することは私にとって欠かせない項目となり、今回の来日に至りました。私は特に、国際法が日韓関係においてどのように適用されたか、に関する資料に興味があります。

日本は国際法を受容と採用という面で、東アジアの中で最も成功した国です。国立国会図書館へ足を運んだことで、国際法の様々な日本語訳版を読み、比較することができました。近代日本社会において国際法がどのように解釈・評価されたのかを知ることができ、それは私の研究にとって最も重要な部分となりました。

一次資料に加え、19世紀日本における国際法の発達についての最新の研究も読むことができました。このテーマに関する韓国語・中国語・英語での二次資料もありますが、そういった研究は依然として限られた範囲内のものでした。このテーマに関しては、日本の研究のほうがより詳しく、発展した内容でした。日本の研究者たちは近年、国際法を思想史の観点から研究することに力を注いでおり、そのことは私の将来の研究にとって非常に大きな刺激となりました。さらに日本での滞在中、森武磨教授が指導教授に付いてくださったこと、そして朝鮮近代史研究において第一線で活躍する二人の研究者にお会いできたことは、非常に光栄でした。お会いした研究者は、東京大学の月脚達彦教授と一橋大学の糟谷憲一教授です。このお三方から、研究についての貴重なアドバイスを頂くことができました。

日本へ来たことは、私にとって最高の宝物になりました。それは、研究における目的を果たせたことばかりでなく、神奈川大学の教授や友人と交流する素晴らしい機会を与えてもらったからです。そのおかげで、日本についてさらに深く理解することができました。

森教授と一緒に研究させていただいたことは、忘れられない経験になりました。森教授は、授業中は聡明な指導者として、そして授業後は仲の良い友人のように接し

てくださいました。森教授は私の研究テーマと関係のある様々な研究者を紹介して下さったり、私が日本語を勉強することをいつも励ましてくださいました。森教授と彼の生徒さんたちと横浜を訪れたことを今でも思い出します。森教授の案内のもと、横浜市イギリス館・外交官の家・港の見える丘公園・山手イタリア山庭園など、横浜開港に関するいくつもの史跡を訪れました。横浜散策のあと、森教授は私たちにパワーポイントを使って横浜開港の歴史について講義をしてくださいました。近代の東アジア国際関係を学ぶ一学生として、港町がどのように発展してきたかを知ることが非常に重要なことでした。この横浜散策は、明治政府が日本にいる外国人を統治しようとして行った外交政策について、より深い理解を与えてくれました。

さらに面白かったことは、横浜散策のあとに森教授の主催により開かれた「忘年会」に生徒さんたちと一緒に参加したことです。現代風の日本の忘年会に参加するのは私にとって初めての経験でした。そこでは日本の大学院生にも会うことができ、とても良い機会でした。この忘年会を通してより多くの友人を作ることができ、さらには日本人の「だらしなさ」も垣間見ることができました。

神奈川大学の歴史民俗資料学研究科の大学院生たちとお会いしたことも、印象に強く残っています。キャンパス内を案内してくれたり、図書館での本の借り方、研究室でのスキャナーやコピー機の使い方を教えてくれたのも彼らでした。彼らの研究に対する姿勢には非常に感銘を受けました。みんな表立っては言っていないのですが、深夜まで勉強をするというのが彼らの暗黙のルールのようなものでした。私は特に、定年後に再度勉強することを選んだ年上の大学院生たちに感銘を受けました。彼らはいつも熱心な研究を促すリーダーのような



存在だったのです。自分を厳しく鍛錬するという事は、私が日本の友人から学んだことの一つです。

日本は親切と笑顔に満ち溢れた国です。学生寮で落ち着けるよう手助けをしてくれた年配の男性スタッフ、空港で荷物を見つけるのを手伝ってくれた案内所の方、帰国するときに電車の乗り継ぎを教えてくれた日本人の若い女性など、今でも記憶に残っています。日本は外国人を歓迎してくれる国だと度々耳にしますが、今では私もこの意見に大いに賛成です。

(路平さんにも心から感謝の意を表したいです。彼女の通訳や手助けがなければ、私は研究目標をこんなにも

スムーズに達成することはできなかったでしょう。)



## 日本における口承文芸のデータベース化に関する調査の旅

包 媛 媛  
(北京師範大学文學院)



民俗学の研究分野においては、各国ともに自国の口承文芸資料の収集、整理及び保存のために、大量の資金と人力を注ぎ込んでいる。今回、私は幸運なことに神奈川大学非文字資料研究センターへ訪問する機会を得ることとなり、「日本における口承文芸のデータベース化の実践」というテーマを設定した。調査を通じ、日本の口承文芸データベース化作業の近況と研究成果について全面的に理解し、それを踏まえた上で実践においてデータベースのシステムがどのような方法を用いて構築されたのかを明らかにしたい。

本格的な調査に入る前に、まずは小熊誠先生のご指導のもとでインターネットに公開されたデータベースを調べ、日本口承文芸はどのように公開され、どのように運用されているのかを考察した。主に調査したのは、「民俗語彙データベース」、「日本民謡データベース」、「東アジア民話データベース」、「日本昔話資料データベース」(稲田浩二による収集)、「秋田昔話データベース」である。これらから以下のことがわかる。資料の収集であれ、話型の分類であれ、収集地の概況及び語り手に関わるライフストーリーであれ、専門的な民俗学者の主導のもと、日本の口承文芸のデータベース化の成果には、専門化の特徴が強く見られつつも、全体において忠実な記録をなすという原則が一貫して実施されていること、である。

2月12日に、私は譚静さんの協力を得て本格的に調査に入った。まず、国立歴史民俗博物館の小池淳一教授を訪ね、データベースの作成作業とその運用状況について聞き取り調査を行った。さらに民衆の生活と文化に関する展示物を見学した。日本の民俗文化に感銘を受けると同時に、博物館における口承文芸のデータベース化の成果が実体のある資料として結実し、展示が行われていることが見てとれた。翌日、「東アジア民話データベース」を担当する樋口淳先生を訪ねた。樋口先生は2時間ほど

休みなくご紹介くださり、私は日本の口承文芸のデータベース化の実践の歴史と具体的なデータベース操作について全面的に把握することができた。樋口先生が長年にわたって粘り強く基礎を守りながら口承文芸の資料を収集し保存されてきたことに対して心から敬意を表したい。日本民話データベース委員である常光徹先生との交流もまた、収穫に富むものだった。先生は「日本における口承文芸のデータベース化実践の発生は、近代化過程における伝承の場の消失と大きく関わっている」と詳しく解説してくださった。

小熊先生と彦坂綾さんのおかげで、私はついに、口承文芸研究分野において著名な学者である小澤俊夫先生を訪ねることができ、今回の学術的な“聖地巡礼”の願いを叶えることができた。2月19日に、私は小熊先生のご案内のもと、「小澤昔ばなし研究所」を訪問した。小澤先生は85歳のご高齢だが、思考力も記憶力も非常に高いため、インタビューをしていると、思わず先生がどんどん若く見えていくのだった。話型の分類は口承文芸のデータベース化において最も基礎的な作業であるが、キーポイントとなる作業でもある。小澤先生は私に日本



前列左から小熊誠先生、小澤俊夫先生